



〈生の中の死〉と〈死の中の生〉 : リフトンの Death in Lifeと被爆者の思い

寺沢, 京子

(Citation)

21世紀倫理創成研究, 4:68-84

(Issue Date)

2011-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD01)

<https://doi.org/10.24546/81002781>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002781>



論文

＜生の中の死＞と＜死の中の生＞——リフトンの *Death in Life* と被爆者の思い

寺沢 京子

＜はじめに＞

アメリカの精神科医、ロバート・J・リフトン (Robert Jay Lifton) は、1967 年に『生の中の死——広島¹の生存者』(*Death in Life: Survivors of Hiroshima*) という書を出した。イエール大学の研究者であった彼は、原爆投下後 17 年たった広島を訪れ、70 人余りの被爆者から聞き取り調査をして、精神的側面から被爆者の実態を記したのである。原爆で生き残った者たちの＜生＞の中に、いかに精神的な＜死＞が存在しているかを伝えていて、1969 年に全米図書賞 (National Book Award) という権威ある賞を受けている。

日本でもこの書の存在を知り、広島に関わる研究者たちが 1971 年に翻訳し出版したが、その題は『死の内の生命——ヒロシマの生存者』であった。“Death in Life” というタイトルは＜死の中の生命＞と、言葉を置き換えて訳されたのである。2009 年にこの書は、同じ訳者グループによって翻訳し直され、岩波書店の現代文庫として出版された。その題は『ヒロシマを生き抜く——精神史的考察』で、ここでも“Death in Life” (生の中の死) ではなく、肯定的なニュアンスに変えて題が付けられている。³

本稿ではまず、リフトンの精神分析の書において、いかに被爆者の＜生の中の死＞が表されているかを捉えたい。次に、アメリカでは版を重ねたこの書が当初、日本では必ずしも好意的に受け入れられなかったこと、その理由をも考えたい。日本人 (特に被爆者) の思いは＜生の中の死＞ではなく、旧訳のタイトルのように逆の、＜死の中の生＞ではなかったのだろうか。考

1 Robert J. Lifton, *Death in Life: Survivors of Hiroshima* (New York: Random House, 1967).

2 Robert J. Lifton 『死の内の生命——ヒロシマの生存者』 榊井迪夫、湯浅信之、越智道雄、松田誠思訳 (朝日新聞社、1971)。「訳者あとがき」には「なお、Death in Life の表題は、その意味をとって『死の内の生命』と訳すことにした。原文の表題は、死にとらえられた生命を象徴する」と記されている。

3 Robert J. Lifton 『ヒロシマを生き抜く——精神史的考察』 榊井迪夫など訳 (岩波書店、2009)。

えるにあたっては、原爆をテーマにした日本の文学作品をとり上げ、論を進めたい。

2009 年に出された新訳書では分量的問題から、旧訳書にはあった文学・演劇・映画の章が削除されている。特に、付録として収められていた井伏鱒二の『黒い雨』への論考が割愛されたのは残念である。本稿では、原著でも触れられなかった原爆文学の代表作といえる栗原貞子の詩「生ましめんかな」と、井上ひさしの戯曲『父と暮せば』、そして付録で論じられていた『黒い雨』をとり上げる。これらの作品においては、被爆者たちが精神的に＜死＞を抱えつつも＜生＞に向かおうとしていて、まさに＜死の中の生＞が描かれているからである。

1. ロバート・J・リフトンの＜生の中の死＞

この書にとりかかるまでに、リフトンは既に日本に興味を持っており、4 年間日本に住んだ経験も有していた。それまでの主な根拠地は京都であったが、次第に広島にも関心を持つようになる。原爆の後遺症に関して、心理的側面からの研究がほとんどないのに注目したからである。そして彼は、原爆投下 17 年後の広島で、被爆者たちがなお精神的に深い傷を抱えている実情を、被爆者との面会を通して分析した。対象とした被爆者は、広島大学原爆放射能医学研究所の無差別抽出で選ばれた 31 名と、学者、作家、医師などから成る 42 名で、計 70 名余りの人々であった。被爆者の原爆体験と 17 年後におけるその意味、心の中にいかなる恐怖、懸念が残っているか、自己の体験をいかに克服しようとしているかなどを、面接を通して聞き取り分析したのである。

彼が表す＜生の中の死＞の＜死＞とは、具体的には、身近な者の死（＝自分だけが生き残ったという罪の意識）と、原爆症などにより迫ってくる自己の死への不安である。身近な者の死を見つめつつ自分だけが生き残った場合、彼らを助けることが出来ずに己のみが助かったという罪意識が心を重く支配する。罪の意識に関しては、戦争を止められず、戦争に協力してしまったという罪意識を持つ者もいるという。さらに、自身は助かったものの、白血病などの原爆症で周りが次々に倒れていく現実に接し、迫ってくる自己の死を意識せざるを得ない。死の不安が常に存在するのである。精神と身体は連鎖

しているから、身体的症状から精神的不安へ、また逆に身体的症状へと繋がっていき、被爆者を苦しめることになる。かように生存者たちは常に、罪の意識と死への不安という、死の影に捉われざるを得ず、その＜死＞の呪縛を克服するのは容易ではないのだ。「精神的再生は、原子爆弾という人類史上最大の破壊の心理的克服を意味したが、同時にそれは、さまざまな肉体的、精神的要因により、あくまで悩み多きもの、罪意識をともなったものであった。そしてそれらの要因の多くは、死のイメージと切っても切り離せないものだったのである」⁴。

この書の後半部分では、広島とナチ強制収容所の生存者の共通性についても述べている。罪意識や死の不安から身を守るために、生存者は感情の機能を停止させる傾向があり＜精神的麻痺＞に陥る。広島とナチでの精神的麻痺の典型的症状は、死者との一体化であり、生存者は時を経てからも「歩く屍」、「生ける屍」、「死者同然だ」などの言葉で自己を語るというのである。

リフトンの書には、精神的な＜死＞を克服しようとする人たちも少しは捉えられているが、彼が伝えたかったことは主に、生存者たちの心の中にいかに深く＜死＞が根ざしているかということであった。そのためか、この書は日本では必ずしも好意的に受け入れられたわけではなく、例えば現、広島市長である秋葉忠利は著書『真珠と桜——「ヒロシマ」から見たアメリカの心』の中で、厳しい批判を投じている。彼は、当時はタフツ大学准教授の職にあった。米国では原爆について科学的に論じられる書が求められていて、リフトンの書について「……内容の是非は別として、それに答えられる本は、英語ではただ一冊しかない。ロバート・J・リフトン教授による『デス・イン・ライフ』である。……全米図書賞を受け、現在でも、広島・長崎の被爆者の心を学問的に描いた唯一の本として広く読まれ、信じられ、引用されている。＜パウル・ハーバー＞的な反応以上にアメリカ人の原爆観の基礎になっていると考えて良いだろう」(266) と紹介している。

その上で、日本で出版された翻訳書の書名についての批判から始めてい

4『ヒロシマを生き抜く——精神的考察』176。以降、この書からの引用は()で頁数を記す。

5秋葉忠利『真珠と桜——「ヒロシマ」から見たアメリカの心』(朝日新聞社、1986)。以降、引用は()で頁数を記す。

る。

この本の日本語訳は一九七一年に朝日新聞社から『死の内の生命』として出版された。まず第一にその書名について一言注意したい。原題は Death in Life。直訳すると『生命の内の死』である。そして辞書を見ると「生ける屍」あるいは「生きながらの死」という訳が載っている。それが“living dead”と同義であることも分るはずである。それを何故『死の内の生命』と訳したかについて訳者は「その意味をとって」こう訳したとの説明をつけている。しかし、その「意味」を取るなら当然『生ける屍』とし、その副題を「ヒロシマの生存者」とすべきではなかったのだろうか。(268)

また、書の内容に関して秋葉は、極端に簡略化したことを認めた上で、主要点は「①まず、原爆が落ちるや、広島市民は、自分の生命だけを救おうと、みな自己中心的、自分勝手な行動を取った。②その結果、生き残った被爆者は罪の意識に苛まれることになる。③その罪意識は非常に強いもので、白血病や乳癌さえ起すもとなった。④その罪意識には、全く出口がなく、⑤従って被爆者は「生ける屍」以外の何者でもなくなった。⑥更に、こうした状態を打破ろうと仮に一個人が世界平和達成のために努力をしたにしろ、歴史の流れの前には人間一人の努力など何の役にも立たない」(269)としているのである。

リフトンの書では、多くの被爆者のインタビューを通して、科学的に詳細に論じられているので、この要約は一面的であろう。だが「被爆者の苦しみ悲しみの原因は原爆であり戦争なのである。そして原爆や戦争のつけを弱い個人個人に押しつけてしまう世の中の仕組である。それが私の言いたいことである」(277)という秋葉氏の意見は、日本人共通の思ではないだろうか。

また、被爆詩人、栗原貞子は次のように書いている。

リフトン氏は「被爆者が罪意識からぬけ出るために、トルーマン大統領や日本の戦争指導者、アメリカの科学者、アメリカの資本家などに

罪を転嫁するのは邪道である」と言い、原水禁運動への参加も固定観念をつくる結果、苦汁（毒）となるとして否定的である……リフトン氏は投下責任の追及や運動への参加を否定しており、被爆者は「死にながらの生を生きている」としているのである。『死の内の生命』をまろごと肯定する限り、出口はないのである。⁶

リフトンの書では「投下責任の追及や運動への参加を否定」まではしていない。しかし、アメリカの精神科医であるリフトンが、この書では原爆を投下したアメリカ自身の「罪」に関しては言及していないこと、生の中の＜死＞に力点を置いたことで、詩人はこのように感じたのであろう。栗原貞子は自ら被爆しながらも、詩作とともに原水禁運動や平和活動に邁進していくという、未来志向の生き方を選んだ。被爆者にとっては、心の中に＜死＞を抱えつつも、＜生＞の方向にいかに進むかということが切実な思いなのである。

日本での翻訳の際、英文のタイトルを直訳して＜生の中の死＞としなかったのは、このような被爆者の感覚に配慮したからであろう。＜生の中の死＞

6 栗原貞子『核時代に生きる——ヒロシマ・死の中の生』（三一書房、1982）50-51. また、栗原は『ヒロシマの原風景を抱いて』（未来社、1975）で『『死の内の生命』への疑問』として次のように書いていた。

ABCC が原爆による肉体的影響を、生存被爆者や、被爆者の遺体を使って病理研究する機関であるならば、ナショナル・ブック賞を受賞したアメリカの精神医学者 R・J・リフトン氏の『死の内の生命』（邦訳題名）は、被爆者の心理奥深くメスを入れた原爆による精神的影響を調査する ABCC 的心理研究であるまいか。もちろん、この本は学問的立場から鋭い分析力を駆使し、系統的に記述されたもので、日本人が手をつけなかったこの分野での貴重な研究であることはだれも否定出来ないであろう。にもかかわらず読後に残るものは、被爆者やその運動に決定的な致命傷をあたえるような悪いイメージであり、何とも後味がわるい。（91）

この栗原の言葉に対し、広島大学教授であった芝田進午は「広島の被爆詩人・栗原貞子夫人は、その著書で、リフトンの著書を『被爆者の心理奥深くメスを入れた原爆による精神的影響を調査する ABCC 的心理研究ではあるまいか』と評し、その『事実のみに基づいて書いた』という実証主義をきびしく批判しておられるが、同感である」と書いている（芝田進午『現代の課題Ⅰ 核兵器の廃絶のために』（青木書店、1978）214.）。

という題からは「生ける屍」という言葉が連想され、秋葉や栗原が言うように、被爆者に「出口はない」と捉えられる恐れもある。ゆえに、2009 年の新訳のタイトルも＜ヒロシマを生き抜く＞であり、死を克服して前向きに生きるという姿勢を表しているのだ。

リフトン自身、約 40 年経た 2009 年の新訳への序文では、副題を＜被爆者の英知＞とし、「人間は意味を糧に生きている。生存者たちは自分が体験した死との遭遇に意味を与えることによって、彼らだけが知る真実に到達するのである」(v) と書き、「本書は被爆者の英知を世に広めるために書かれたのである」(ix) と結んでいる。またその序文には、かつて「創造者としての生存者」(“Survivors as Creator”) という論文を書いたこともあり、そこでは第二次世界大戦の体験から世界に英知をもたらした 3 人の人物を取り上げた、とも記している。「創造者としての生存者」は *The Future of Immortality and Other Essays for a Nuclear Age* に収められているエッセイの一つであり、確かに生存者を肯定的に捉え、希望を感じさせる内容である。カミュ (Albert Camus) などの 3 人をとり上げ「生きのびた者の苦痛に満ちた英知は、少なくとも潜在的に、人類の英知となり得る」(“The painful wisdom of the survivor can, at least potentially, become universal wisdom”)⁷ と讃えている。新訳の序を書いた時点では、この 3 人と同列に、広島生存者を捉えようと考えたのだろう。

新訳で解説を書いている田中利幸は、リフトン自身も広島での調査、研究を通じて、人間としての飛躍を遂げていったとしている。リフトンは広島に関わった後、ベトナム戦争帰還兵の精神分析、戦争の残虐行為への批判的分析に取り組み、反核、反戦運動にも進んでいったのだ。グレグ・ミッチェル (Greg Mitchell) と共に記した『アメリカの中のヒロシマ』(*Hiroshima in America: Fifty Years of Denial*) では、アメリカがいかに原爆投下を正当化し、検閲などを通して、広島の悲惨な状況を隠蔽しようとしたかを表している。⁸ リフトンは『死の内の生命』では言及しなかったアメリカの罪に対しても、『アメリカの中のヒロシマ』において、追究したといえるのではないだろうか。

7 Robert J. Lifton, “The Survivor as Creator.” *The Future of Immortality and Other Essays for a Nuclear Age* (New York: Basic Books, 1987) 245.

8 Robert J. Lifton and Greg Mitchell, *Hiroshima in America: Fifty Years of Denial* (New York: Putnam's, 1995).

また彼は、日本人の精神について興味を抱き続け、1977年には加藤周一、M. ライシュと共に『日本人の死生観』を著している。⁹さらに、オウム真理教事件にも強い関心を持ち、2000年には『終末と救済の幻想』を記し、この事件が抱える構造的な問題を掘り下げて論じている。¹⁰リフトンは『死の内の生命』を著した以降も、日本人の精神という問題にかかわり続けた研究者なのである。

2. 原爆文学の中の<死の中の生>

A. 栗原貞子の「生ましめんかな」

被爆詩人、栗原貞子の代表作に「生ましめんかな」という詩がある。これは実話をもとに、詩人が描いた詩である。¹¹詩の中の地下室は、千田町（現広島市中区）の旧郵便局の地下室だ。初出は『中国文化』創刊号（原子爆弾特集号 1946.3）で、「生ましめん哉」として掲載された。『中国文化』は作家、細田民樹が栗原貞子夫妻と徹夜で語り明かし「戦争が終わったら、文化運動を始めよう」と決意し、始められた雑誌である。次に詩を記す。

「生ましめんかな」

9 加藤周一、M. ライシュ、R. J. リフトン著『日本人の死生観』矢島翠訳（岩波書店、1977）。

10 ロバート・J. リフトン『終末と救済の幻想』（岩波書店、2000）。

11 聞き伝えて「生ましめんかな」を書いた栗原は後に、赤ん坊を産んだ女性（平野美貴子）と会った。そして『核時代に生きる——ヒロシマ・死の中の生』に、以下のように書いている。

（美貴子さんは）「あの時、地下室にいらなかったのに、その時の状況や、私たちの気持ちを、そのまま作品化して下さって」と言ってよろこんで下さった。

美貴子さんは当時のことを話して下さった。爆心約一・五キロの千田町の自宅で被爆した美貴子さんは、二歳の美子さんをつれて臨月のお腹を抱えて京橋川の土手に逃げた。間もなく家は火に包まれた。……広島電話局（爆心〇・五キロ）から、姉の佐藤富士子さんが全身黒く焼けて這うようにして帰って来た。八日の夕方、姉妹は貯金局の地下室へ避難したのだった。その夜、美貴子さんは産気づいたのだった。その時、「私が生ませてあげましょう」と言った産婆さん（三好ウメノさん）は背中一面と左腕の肘までやけどだれていた重傷者だった。赤ん坊は元気な産声をあげたけれど、地下室には産湯を使わせるような設備はなかった。（8-9）

—原子爆弾秘話—

こわれたビルデングの地下室の夜であった。
 原子爆弾の負傷者達は
 ローソク一本ない暗い地下室を
 うずめていっぱいだった。
 生ぐさい血の臭い、死臭、汗くさい人いきれ、うめき声。
 その中から不思議な声がきこえて来た。
 「赤ん坊が生まれる」と云うのだ。
 この地獄の底のような地下室で今、若い女が
 産気づいているのだ。
 マッチ一本ないくらがりでどうしたらいいのだろう。
 人々は自分の痛みを忘れて気づかった。
 と、「私が産婆です。私が生ませましょう」と云ったのは
 さっきまでうめいていた重傷者だ。

かくてくらがりの地獄の底で新しい生命は生まれた。
 かくてあかつきを待たず産婆は血まみれのまま死んだ。
 生ましめんな
 生ましめんな
 己が命捨つとも¹²

この詩はまさに＜死の中の生＞を表しているといえる。原爆投下後の地獄の状況下で、一人の若い女性が産気づいた。＜赤ん坊が生まれる＞という不思議な声がしたとあるが、この地獄には全くふさわしくない言葉だったのに相違ない。原爆投下直後の、＜生＞から最も遠い絶望的な状況の中で＜赤ん坊が生まれる＞というのである。まさに＜死＞の中で＜生＞を生み出そうとしているのだ。＜人々は自分の痛みを忘れて気づかった＞とあるが、誰もが自分の苦しみをしばし忘れて、新しい命を救いたいと願ったことだろう。そして、その中に一人の産婆もいた。彼女自身＜さっきまでうめいていた重傷

12 栗原貞子『栗原貞子詩集』（土曜美術社出版、1984）16-17.

者＞だったが、若い女性の声に、産婆としての使命感が呼び起されたのだろうか。人間として、同じ女性として新しい生命を守らなければならないという強い意志に動かされたのだろうか。最後の力をふりしぼって、自分の生命とひきかえに、母親と赤ん坊の生命を救ったのである。＜マッチ一本ないくらがり＞の中で、自分も瀕死状態であったにも拘らず、懸命に新しい生命を＜生ましめ＞たのだ。この詩には描かれていないが、赤ん坊のうぶ声が聞こえた時、その場に居た人も皆、どんなにか安堵したことだろう。まさに＜死＞の中で＜生＞の声だったに相違ない。

最終連の1、2行「かくてくらがりの地獄の底で新しい生命は生まれた／かくてあかつきを待たず産婆は血まみれのまま死んだ」の対比は印象的である。新しい生命と入れ替わるように、産婆は生命を失ったのだ。だが、彼女は重要なことを成し遂げてから、自身の生命を全うしたといえる。「生ましめんかな／生ましめんかな／己が命捨つとも」という言葉は、産婆の言葉であり、被爆者の言葉であり、ひいては善意を持つ人間全体の言葉であるはずだ。たとえ己の命を捨てようとも、未来の希望につながるものを残したいという思いである。栗原貞子自身は、この詩について次のように書いている。

崩れた地下室の中で生まれた赤ん坊は、一体何だったのでしょうか。それは平和の希望である「ひろしま」だと思います。そして、血まみれのまま暁を待たずに死んだ産婆さんは、八月一五日の平和の日を待たずに死んだ二〇万人の被爆者です。二〇万人の被爆者が死ぬことで、新しい「ひろしま」が生まれたのです。¹³

この「生ましめんかな」は人々に広く受け入れられていて、様々な識者が評している。

黒古一夫は『原爆とことば』の中で「＜地獄＞の中の光明、死と生のドラマ、人間の生に対する信頼、どのように形容してもよい、確かなのはここに描かれている世界が諦念や絶望の対極にあるということである」と書いている。¹⁴ 日高六郎は『戦後思想を考える』の中で、この詩は「直線的にアメリ

13 『核時代に生きる——ヒロシマ・死の中の生』10.

14 黒古一夫『原爆とことば』（三一書房、1983）145.

力の原爆投下責任を問うてはいない。しかし当時、雑誌発行の責任者である栗原さんの夫は、占領軍に呼ばれて、さんざんいやがらせをうけているのである。そこには原爆の悲惨と、そのなかで懸命に嬰兒を産もうとする若い母親と、出産を助けたうえで力つきて死んでいく産婆さんとがえがかれているだけであるのに。しかし、ここでの生と死の交錯は、死をのりこえる新しい生命の誕生という、たからかな生の賛歌となっている¹⁵と記している。秋葉忠利も『報復ではなく和解を』で「現実の世の中、私たちが生きる世の中の現実、その現実の中でやはり私たちが心動かされるのは、子どもであり、生きることであり、未来を創るエネルギーなのではないでしょうか。その中で、女性がどれほど本質的な役割を果たしていくのかということが、この短い詩の中で、広島¹⁶の思いとして見事に表現されていると思います」と述べている。

極めて困難な状況の中においても、人間に生きる力を与えるのは、未来への〈希望〉ではないだろうか。リフトンが新訳の序文に書いたように「人間は意味を糧に生きている」とすれば、心に〈死〉を抱えつつも、自分の体験に意味を見だし、それを糧にして未来へ生をつないでいくことが重要なのである。

栗原貞子は後に、原爆被害者としての視点から、アジア諸国への加害者の視座をも捉えていく。そして「生ましめんかな」と共に有名な「ヒロシマというとき」という詩を書くに至る。その詩は 1972 年に発表されているが、当時はまだベトナム戦争が終結しておらず、ベ平連運動に関わっていた詩人は、日本の加害性にも気づいたのだ。彼女は日本 YWCA が催していた「ひろしまを考える旅」にも毎年、講師として参加していて、中高生の参加者に向かって、日本がアジア諸国を侵略してきた歴史を語っている¹⁷。彼女の詩「ヒロシマというとき」は、「〈ヒロシマ〉というとき／〈ああ ヒロシマ〉と

15 日高六郎『戦後思想を考える』（岩波書店、1980）43.

16 秋葉忠利『報復ではなく和解を』（岩波書店、2004）56.

17 日本 YWCA(Young Women's Christian Association) が「核否定の思想に立つ」という方針に基づいて「ひろしまを考える旅」を始めたのは、1971 年のことだった。しだいに中高生が中心となり、様々な国からも旅への参加者がある。栗原貞子は、文学をテーマとする語り手だった。

／やさしくこたえてくれるだろうか」から始まり、「＜ヒロシマ＞といえ
／＜ああ ヒロシマ＞と／やさしいこたえがかえって来るためには／わたし
たちは／わたしたちの汚れた手を／きよめねばならない」という言葉で結ば
れている。この詩も広く読まれ、平和に関する様々な書に引用もされている。

B. 井上ひさしの『父と暮せば』

井上ひさしはある対談で、この劇を書こうとした理由を、次のように語
っている。

たまたま話してくださると異口同音に、「あの時の広島で死ぬのが自然
で生き残るのが不自然だった。だから申し訳ないこうして生きている
のが」とおっしゃるのです。この言葉は大変な衝撃でした。わたしも
戦争の時代の子供ですから、戦争を知っていると思い込んでいまし
たが、わたしの知っているのは戦争なんてものじゃなかったのだと痛
切に思い知らされました。そんな人間がヒロシマ、ナガサキを書いて
はいけない。そんなことをしたら思い上がりだと考えて、原爆のこ
とを書こうとしなかったのです。けれども八年前、息子を授かったとき
「この子に、父親が原爆や核兵器をどう考えていたのか、伝えたい」と
思い立ちました。とにかく「伝えなければ！」と考えたのです。そし
てこの思いがそのままこの芝居のテーマになりました。¹⁸

被爆者の言葉で井上に衝撃を与えたのは「生きているのが申し訳ない」と
いう、まさにリフトンの唱える被爆者の＜罪意識＞であったことが判る。だ
が彼は、息子の誕生を機に自分の考えを伝えたいと思い、この戯曲を表した
のだ。この『父と暮せば』の前口上には「……世界五十四億の人間の一人と
して、あの地獄を知っていながら、＜知らないふり＞することは、なににも
まして罪深いことだと考えるから書くのである。おそらく私の一生は、ヒロ
シマとナガサキとを書きおえたときに終わるだろう」と記されている。¹⁹ 彼
は人間として、どうしても書かねばならぬという使命感をもったのである。

18「井上ひさしの宇宙」『国文学解釈と鑑賞 別冊』（至文堂、1999）57。

19 井上ひさし『父と暮せば』（新潮社、2001）5.以降、引用は（ ）で頁数を記す。

惜しくも、井上ひさしは2010年4月に他界した。しかし彼の『父と暮せば』は、これからも上演され続けるに違いない。栗原貞子の「生ましめんかな」と同様、直接的な戦争批判が表されているわけではないが、それゆえに普遍的な広がりや深さを有しているからである。第2回読売演劇大賞で賞を受け、国内だけでなく海外公演も好評で、2004年には映画化もされている。

戯曲に登場するのは一人の若い女性（美津江）とその父親だけで、いわゆる二人芝居である。父親というのは、実在している人物ではなく、女性の心の中の存在（＝幻）だ。二人の科白は、温かさを感じる広島の方言である。美津江は図書館に勤務していて、そこである青年と出会い心惹かれる。だが彼女は「うちよりもっとえっとしあわせになってええ人たちがぎょうさんおってでした。そいじゃけえ、その人たちを押しのかけて、うちがしあわせになるわけには行かんのです」（67）と、人を好きになることを自身で禁じようとする。リフトンの書にある＜生の中の死＞が、まさに彼女の心には深く根ざしているのだ。身近な者を救うことが出来ず、自分だけが助かったという罪の意識である。彼女は、自分より優れていた親友が死んで、己が助かったという罪の意識に捉われている。さらに彼女を苦しめているのは、父を救えなかったという事実である。「うちはおとつたんを地獄よりひどい火の海に置き去りにして逃げた娘じゃ。そよな人間にしあわせになる資格はない……」（99）と自分を責め、自身の未来を閉ざそうとするのである。

この劇には、リフトンが示していた二つの＜死＞が表されているといえる。二つの内、＜罪の意識＞が強調されてはいるが、原爆症の＜死の不安＞もまた書かれている。「……もしかしたら原爆病か。あいつがいつ出てくるかもしれんけえ、そいで人を好いちゃいけん思うとるんじゃな」（65）などの科白がある。かように、主人公は二つの＜死＞に支配されている。しかし、この劇の主旨は＜死＞を表すことではない。大切なメッセージが父親の口を通して語られるのだ。「あよなむごい別れがまこと何万もあったちゅうことを覚えてもらうために生かされとるんじゃ」（104）「人間のかなしいかったこと、たのしいかったこと、それを伝えるんがおまいの仕事じゃろうが」（105）という。つまり悲惨な事実を記憶し伝えるために、前向きに生きるべきだというのだ。

劇中の父はヒロインの心の幻である。彼女の心の中では常に＜死＞と＜

生＞が闘っていたのであろう。＜死＞に捉われつつ生きていたが、恋愛に直面して＜生＞への断ち難い思いが湧いてきた。だが、父を見殺しにしたという罪の意識が、前向きな＜生＞を阻もうとする。その苦しい心の葛藤の過程で、父の幻に出会い、その言葉に救いに見出したといえる。彼女は、リフトンが表した＜死＞の呪縛と、心の中で格闘して何とか打ち勝ったといえるだろう。さらに、悲惨な事実を記憶し、伝えるべきだと悟ったことは、父の死を無駄にしたいくないという彼女の決意であったに相違ない。父の幻と対話するということは、亡き父が自分に何を望んでいるのかを真摯に考えることであった。父と同じように、あまりにも多くの人々が犠牲になった。犠牲者を記憶し、その思いを伝えることは、彼らをも＜生かす＞ことになるのではないだろうか。また、彼女が結婚を選択することは、生命を繋いでいくことにもなるだろう。新しい生命に希望を託したいと願うのは、栗原貞子の「生ましめんかな」に共通する思いである。大江健三郎が『ヒロシマ・ノート』に、次のように書いていたことも思い出す。

自分の悲惨な死への恐怖にうちかつためには、生きのこる者たちが、かれらの悲惨な死を克服するための手がかりに、自分の死そのものを役だてることへの信頼がなければならない。そのようにして死者は、あとにのこる生者の生命の一部分として生きのびることができる。²⁰

『父と暮せば』のヒロインは、罪の意識や原爆症の不安という＜生の中の死＞に打ち勝ただけでなく、死者との対話を通し、亡き者の死を無駄にしないという、未来志向の生き方を選んだと捉え得るのである。

C. 井伏鱒二の『黒い雨』²¹

『黒い雨』も原爆文学の代表作として評価の高い作品で、1966年に野間文芸賞を受けている。善良な夫婦と姪が織りなす日常生活と、被爆直後の日記を巧みに構成させた作品である。リフトンも、この作品を評価していて『死の内の生命』の付録で論じている。一方、大江健三郎の著書『あいまいな日

20 大江健三郎『ヒロシマ・ノート』（岩波書店、1965）106。

21 井伏鱒二『黒い雨』（新潮社、1970）。以降、引用は（ ）で頁数を記す。

本の私』には、「井伏さんの祈りとリアリズム」と題した講演録があるが、²²両者の視点はかなり異なっている。本章では『黒い雨』についてのリフトンと大江の視点の相違をもとに、＜生の中の死＞と＜死の中の生＞について考えたい。

リフトンは、『黒い雨』は原爆文学に新しい次元を開いて見せた作品であり「原子爆弾の小農村の日常的リズムへの侵入を描き、＜日ごろの平凡事＞と＜空前の出来事＞とを巧妙に融合したことによって、作品はあの経験を、意味深い芸術的形式に変容している」と評価している。²³しかし、彼の論はやはり＜罪の意識＞、＜死の呪縛＞という観点から進められている。つまり＜生の中の死＞というテーマに沿って論じられているのである。

この小説の主な登場人物は良識のある市民、閑間重松・シズ子夫妻と姪の矢須子であるが、夫婦が姪を広島に連れて来たことへの罪の意識、被爆直後に出会った人々を救えなかった罪の意識が、まず論じられている。矢須子の縁談が、原爆症の恐れがあるとされ進まないことにも、夫婦は強い責任を感じている。また重松は、会社の同僚など多くの人々が亡くなったが、混乱の中で丁重に葬る場がないため、仏教のお経を覚えて弔う役目を担うことになる。そんな彼自身、彼の生存を諦めていた実家では、既に原爆の犠牲者として弔われていたことが判る。それについてもリフトンは「重松は……すでに＜死んだ＞生存者として描かれている」(508) と捉えているのだ。また、地域の伝統に沿って生死の問題に取り組もうとする重松を「彼の困難さは、原爆によってもたらされた＜生のなかの死＞という特殊の性質について、なんの指針も見いだせないこと、死者と生者のどちらを導く、なんの手だてもないことである」(508) とも記している。そして「われわれは被爆者の拒否的な反応は、死への不安と死の罪の意識の再活動に基づくのであって、どんな原爆小説も避けることはできなかったことを知っている。しかしわたしが、ここでいいたいのは、この著名な作家による非常に優れた小説でさえ、原爆の体験に対する想像力の誠実な活動がかえって一定程度の想像力の拘束を示さざるをえないということである」(512-513) と、作品を評しているのである。また注釈では、黒い雨が人体に与えた影響に関しても言及して「大部分

22 大江健三郎『あいまいな日本の私』(岩波書店、1995)。以降、引用は()で頁数を記す。

23『死の内の生命——ヒロシマの生存者』503。以降、引用は()で頁数を記す。

の専門家は医学的に重要な程度のもではなく、したがって<黒い雨>はそれ自身として大して害のあるものではないと信じている」(512)と書いているが、はたしてこの注釈は科学的だといえるだろうか。

この『黒い雨』の最終部分には、鰻の子が川を遡ってくる様子が描かれている。8月6日当日も、近辺を遡上していたはずの稚魚(地方ではピリコという)が、8月15日に元気よく遡ってくる姿である。15日は、天皇がラジオ放送で敗戦を告げた日だ。「僕は溝の縁にしゃがんでピリコの背中を見較べたが、灰色の薄いのと濃いのがいるだけで被災したらしいのはいなかった」(379)と描かれている。姪の矢須子は黒い雨が原因で原爆症に罹り、容態は深刻なのだが、この鰻の子の姿を見て、重松は希望を抱く。また、重い原爆症から奇跡的に回復した医師、岩竹の治療日記も得て、矢須子の主治医に渡し、治療に役立ててもらおうとするのである。そして「今、もし、向うの山に虹が出たら奇蹟が起る。白い虹でなくて、五彩の虹が出たら矢須子の病気が治るんだ」(384)という重松の言葉で、小説は結ばれている。これに対して、リフトンは「小説の終わり方は謎めいている」(510)としているに過ぎないが、一方、大江健三郎はこの場面に重きを置いている。

大江は次のように書いているのだ。

井伏さんは、『黒い雨』を書いた時期のことを、直接回想してもいられます。この小説を書くについて、とくに自分はこのシーンを書きたかったんだ、と。原爆が落ちて人が苦しんだ、広島は壊滅したと思われていた。そして戦争の責任の大本の天皇の放送がある。その時ひとりの庶民が裏庭に出て、放送を聞きながら川を見ると、小さな溝に鰻の子供がどンドンさかのぼってくる。それが何を表しているかといえば、生命の力を表しているでしょう。新しい生命というものがこんなにある。生きている、命というものが今後も続いていくということを強く感じる。同時に、多くの死者のことを思っている。そういうシーンを自分は書きたかったと先生はいつてられるわけなんです。それが『黒い雨』という小説なんです。(125)

また、大江は「私たちには生命に対する希望を失う理由がないと井伏鱒

二さんは書いていると思います。その上で、苦しい病をやんでいる自分の姪のために祈るように空を見つめている人物を書いて小説を終えられた。こういう偉大な作家を記憶し続けたいと私は考えています」(135) という言葉で結んでいる。リフトンが＜生の中の死＞を論じたのに対し、大江はこの小説から＜死の中の生＞を読み取ったといえるのではないだろうか。どんな悲惨な状況にあっても、人間は＜生＞に希望を繋ごうとする力を有するのである。また彼は、井伏鱒二がこの『黒い雨』を書いたきっかけが、ベトナム戦争にあったことにも触れている。井伏の「あのころ、アメリカは戦争に一生懸命だったな。アメリカがベトナムへ出撃していく様子が、毎日のようにニュースになっていた。歯止めのない感じだった。これに反対することを書いたりいい、とさえ思った。『黒い雨』はベトナム戦争があったから書いたようなものだ」(126) という言葉を紹介しているのである。戦争の悲惨さを深く知る作家にとって、ベトナム戦争を許すことは到底出来なかったのだろう。その思いを、ペンの力で表したのである。

だが、『黒い雨』も「生ましめんかな」や『父と暮せば』と同様、直接的な戦争批判は描かれていない。善良な市民の日常生活を淡々と記しているのだが、それゆえになお、戦争の悲惨さは伝わってくる。平凡な日常のあたりまえの生活を、無残に破壊する戦争の正体が浮かび上がってくるのだ。さらに、これらの作品には生命を繋いでいこうとする希望と祈りも込められている。まさに＜死の中の生＞が描かれているのである。

＜おわりに＞

ロバート・J・リフトンの精神分析の書と、日本の原爆について描かれた作品には、それぞれ＜生の中の死＞と＜死の中の生＞が表されていた。リフトンの書では、被爆者の心の中には常に、罪の意識と死への不安という＜死＞の影が在って、生きることを困難にしていると記されていた。一方、栗原貞子の詩、井上ひさしの戯曲、井伏鱒二の小説では、＜死＞の中にあっても、困難を乗り越えて＜生＞に向かおうとする被爆者が描かれていた。「生ましめんかな」には、地獄の苦しみから＜生＞を生み出す姿が表されている。『父と暮せば』のヒロインは、亡父との対話から「生きて記憶し伝える」ことを誓うのである。そして『黒い雨』では、被爆者の悲惨な現実の中にも、生命

への希望と祈りが込められている。リフトンの書が、日本人に好意的に受け入れられなかったのは、私たちが＜生の中の死＞ではなく＜死の中の生＞こそを望んでいたからではなかっただろうか。

かつての広島市長、平岡敬は著書『希望のヒロシマ』の中で、「広島・長崎を記憶することは、ただ単に過去を思い出すだけではなく、これから自分はどの方向に向かっていくのかということに示唆を与える役割を果たします。……つまり、記憶は過去と未来の接点なのです」と書いている。²⁴ 今や＜核＞は被爆者や被爆国だけの問題ではなく、人間全体の問題である。過去を封印するのではなく、過去から学び、犠牲者の思いを汲み取ることでこそ、＜死＞を＜生＞に向かわせることが可能になるのである。

世界は核の拡散という大きな脅威の下にある。テロリストに核が渡るという怖れも現実的なものとなった。反核の動きは以前よりは進み、2010年8月6日の広島での平和式典には、国連事務総長の潘基文（パン・ギムン）氏を始めとして、70か国以上の政府代表が参列した。核保有国では、これまでも参列したロシア、中国以外に、米国大使や英仏の代表も加わった。今後さらに、国境を越えて私たち人間が過去から学び、共に＜生＞をつないでいく道を考えることが重要である。それが悲惨な戦争の＜死＞を、＜生＞に転化させることであろう。

（神戸大学大学院人文学研究科・非常勤講師）

24 平岡敬『希望のヒロシマ』（岩波書店、1996）36.